

2018年度 センター試験 国語 (本試験) ワンポイント解説

<p>第1問</p>	<p>問1</p>	<p>(ア)の「意匠」と(エ)の「摂理」がぱっと浮かばなかった受験生もいたかもしれないが、特に引っ掛かりやすいものはない。</p>
	<p>問2</p>	<p>傍線部が直前の2文「世界は多義的でその意味と価値はたくさんの解釈に開かれている。世界の意味と価値は一意に定まらない。」を受けた文であり、傍線部中の「講義」が「世界」の具体的な一つの例であることをつかめば、「たくさんの解釈」があり「一意に定まらない」から「講義」は「素朴に不変な実在とは言いにくい」ということになるということがつかめるはず。また、次の4段落の初めに、「冒頭の授業者の宣言は授業の意味を変える。すなわち授業のもつ多義性をしぼり込む。」とあることに注目すると選択肢は選びやすい。選択肢①⑤は「授業者の冒頭の宣言によって～」、②③④は「授業者の冒頭の宣言がなければ～」となっているが、「授業者の冒頭の宣言がなければ～」というのは、「授業者の冒頭の宣言によって～」を裏返した言い方になっているだけである。授業者の冒頭の宣言があることによって「授業の多義性がしぼり込まれる」のであるから、裏返せば授業者の冒頭の宣言がなければ「授業は多義性をもつ」ということになる。この意味が説明されているのは①と②だけであり、③は「学生の授業の聴き方」、④は「学生にとっての授業の目的」、⑤は「学生のふるまい」と「授業の意味」とは異なることを説明しているのはおかしいとわかる。その上で①の選択肢の後半は「学習の場における受講者の目的意識と態度」について述べているのでおかしいとわかる。</p>
	<p>問3</p>	<p>4人の生徒の会話に中にある空欄を補充させる問題であるが、傍線部問題なのであるから、傍線部を含む部分をしっかり読むことがまず基本である。傍線部の次の文で「このことでモノから見て取れるモノの扱い方の可能性、つまりアフォーダンスの情報が変化する」とあることに注意すれば、傍線部の図1の例は「モノの扱い方」の可能性が「変化する」ことを示した例だとわかる。それを説明している選択肢は⑤しかない。また空欄の前の文に注意しても「デザインを変え」ることと「扱い方」の関連について述べていることがわかるから、そこから②か⑤に絞ることができる。そして、空欄の後の生徒Dの発言から、空欄が「今ある現実の別のバージョンを獲得する」ことの意味を述べていることがわかるので、②の「無数の扱い方が生まれる」がそれに合わない判断して、⑤に決定することができる。</p>
	<p>問4</p>	<p>選択肢の形がきれいにそろえて作られているので、そこに着目すると判断しやすい。どの選択肢も「現実～」。そのため、人間を記述し理解する際には、～が重要になってくるから。」という形になっている。選択肢1文目の「現実～」というのは、「現実」がどういふものであるかを説明しているわけであるから、まずここに注目して、本文でどのように説明されているかをチェックする。同じ段落の傍線部の前に書かれている内容が「現実」の説明である。私たちが住まう現実＝環境が、文化から生み出された人工物に媒介された世界、つまり文化的実践によって変化させた世界、別の言い方では、自分たちの身の丈に合わせてあつらえた現実であると説明されている。これが書かれているかどうかで各選択肢をチェックすると①②④が明らかにおかしいことがわかる。次に選択肢2文目の「そのため、人間を記述し理解する際には、～が重要になってくる」というのが、傍線部「このことは人間を記述し理解していく上で、大変重要なこと」の言い換えになっていることを押さえる。選択肢2文目中の「～」の部分は傍線部の「このこと」と対応することがわかるので、そこから残った③と⑤を比較すればよい。⑤の「デザインによって人工物を次から次へと生み続ける、人間の創造する力」は、明らかに「このこと」の指示内容と合わない。</p>
	<p>問5</p>	<p>説明問題であるから、傍線部中の「心理学」の説明がきちんとされていなければまずい、ということを考えること。選択肢は長めであるが、どの選択肢も最後が「心理学」が必要であるということと揃っているだけでなく、「心理学」という言葉に長い連体修飾がかかっている。連体修飾は下の体言の「説明」であるから、まず各選択肢のこの部分にチェックを入れる。傍線部の後ろでは「心理学」は「私たちのこころの現象は、文化的歴史的条件と不可分の一体である心理学として」と説明され、さらにその後で「心理学」は「文化心理学」のことであり、そこでは「人間を文化と深く入り交じった集合体の一部であると捉える」と説明されている。その点を説明している選択肢は①しかない。</p>

	問 6	<p>(i)</p> <p>④は『「私たち』は、両方とも、筆者と読者を一体化して扱い』とあるが、はじめの「私たちはこうした～考える。」の「私たち」は「環境の改変を、人間の何よりの特徴だと考える」人たをあらわしており、それは学問の世界にいる、「筆者たち」ということになる。</p> <p>(ii)</p> <p>①「最後に該当例を挙げて統括を行っている」が明らかにおかしい。</p> <p>②「個別の具体例を複数挙げて共通点を見出し」「そこから一般化して抽出した結論をまとめ」が明らかにおかしい。</p> <p>③「結論部で反対意見への反論と統括とを行っている」が明らかにおかしい。</p>
第2問	問 1	<p>(ア)「腹に据えかねる」は、「我慢できない」という意味である。</p> <p>(イ)「戦く(おののく)」は「おそれふるえる」という意味。「こわがってびくびくする」という意味の「おびえる」という語を含む⑤が正解である。</p> <p>(ウ)「枷」はもともと「罪人の首や手足にはめて自由に行動できないようにする刑具」を意味するが、そこから転じて「人の行動をさまたげるもの」という意で使われるため、「枷が外れる」とは「さまたげ＝制約がなくなる」という意味となる。</p>
	問 2	<p>傍線部 A は前段落の内容を受ける形となっている。仏様がこちらにくる際に乗るキュウリの馬を息子と夫のそれぞれに一頭ずつ作った一方で、帰るときに乗る牛(茄子で作った牛)を作らなかったことに、「べつに帰らなくていい」「ずっとわたしのそばにいればいい」と思った自らの心情に対して、夫・俊介が苦笑したように見えた、というのである。以上の前段落の内容を正しく含んでいる③が正解である。①は夫を「今も憎らしく思っている」という部分がおかしい。「べつに帰らなくていい」という心情に明らかに反している。②自分の憎まれ口に対してただ黙り込むだけだったことに夫は「後ろめたさを感じていた」としているが、このような内容は本文に示されていない。④「今も皮肉交じりに笑っているだろうと想像している」が誤り。生前の夫・俊介は郁子がキュウリの馬を作ったことに「熱心にやるね」とからかう口調で言ったとあるが、これは皮肉となっていない。したがって「今も皮肉交じりに笑って」というのは、おかしいことになる。⑤「夫に甘え続けていたことに今さら気づいた」という部分が誤り。傍線前段落の内容をまったく受けていない。</p>
	問 3	<p>傍線部の後ろでは、まず「面食らいながらお礼を言って」そのあとに三十数年前を回想している。「面食らう」というのは「あわてふためく」という「心情」であるし、「回想」も心情であるから、この2点が「心の動き」となる。以上を踏まえて選択肢を吟味する。②は「物足りない」という心情、③は「まだ席を譲られる年齢でもないと思っていた」という心情がそれぞれ誤り。本文にこのような心情は示されていない。④は「不思議な巡り合わせを新鮮に感じている」という部分が誤り。席を譲ってもらった現在の出来事が過去の体験と一致していたという巡り合わせに、不思議さや新鮮さを感じているわけではない。⑤は「いささか慌てる」という部分は「面食らう」という本文内容に一致しているが、「時の流れを実感している」という部分が誤り。過去の回想を通して「時が流れた」という実感を持った、という内容は本文に示されていない。①は「面食らう」という心情は説明されていないものの、過去への回想内容を的確に表現しているため正解。「他人にもわかるほど妊娠中の妻を気遣っていた夫」という部分の「他人にもわかるほど」が「妊娠」を修飾していると読んでしまうと「郁子のお腹はまだほとんど目立たない頃だった」という本文内容と一致していない、と誤読してしまう。「他人にもわかるほど」は「気遣っていた夫」を修飾しており、これは「奥さんじゃなくてご主人の様子を見ていればわかります」といった回想中に登場する男性の言動に一致している。</p>
	問 4	<p>笑顔で写真に写る夫と自身の姿に驚いたという心情を踏まえた選択肢を選べばよい。「写真に写るそんな自分たちの笑顔は思いがけないものだった」とする④が正解。①は「どこかの幸せな夫婦が写っているとしか思われなかった」が誤り。傍線部の「それが紛れもない自分と夫であることを何度でもたしかめた」に明らかに反する。また、「悲しみに押しつぶされ、つらい生活を送ってきた」というのを「そのような心の葛藤」としているのも明らかにおかしい。②は「明るく振る舞っていた夫」という部分が誤り。このような夫の態度は本文に示されていない。③は「夫にいらだちを抱いていた」「自分たちのそのような様子は容易に受け入れがたく思われた」という郁子の心情は本文に示されておらず、誤り。⑤は「互いに傷つけ合った記憶があざやか」という部分が誤り。このような記述は本文に見当たらない。</p>

	問 5	理由説明問題であるが、設問部を含む場面の本文内容と照合し矛盾しない選択肢を選べばよい。①は「夫をいとおしむ心の強さをあらためて確認することができた」という部分が誤り。「夫をいとおしむ心」が強く以前からあったわけではないため、「あらためて」というのはおかしい。また、「校内を見るまでもなく若々しい夫の姿がありありと見えてきた」とあるが、「幻」を見ているのであるから「ありありと見えてきた」とするのはおかしいし、さらに「その幻のあまりのあざやかさから」という内容も本文に示されていない。②は「大切なことは記憶の中にあるのだと認識することができた」が誤り。実際に校内を見ることよりも記憶の方が大切だと気づいたわけではない。④長年夫を憎んでいたが「許す心境に達し」とあるが、このような心情は本文に示されていない。⑤は「自分と夫は重苦しい夫婦生活からようやく解放された」という部分が誤り。このような郁子の心情は設問部を含む場面に示されていない。「夫の若々しい姿が自分の中に刻まれていたことに気がついた」とする③が、夫の若い頃の姿が「自分の中に保存されていた」とする 106・107 行目の本文内容と完全に一致しており、正解である。
	問 6	③「他人に隠したい郁子の本音」という部分が誤り。確かに()中の記述は郁子の内面の心情を記述しているが、それは必ずしも「他人に隠したい」ものではない。 ⑥93 行目の「のだった」という文末表現を、「郁子の悔やんでいる気持ち」のあらわれとするのはおかしい。「来訪することはなかったのだった」という表現に、そのことを悔やむ気持ちは含まれていない。
第3問	問 1	(ア)は「あながちに」「わりなく」の意味をともに含むものを選ぶ。前後のつながりにも注意すると、より正解を得やすくなる。なお、「あながちにわりなく」は、第 2 段落 4 行目「いみじく堪へがたき」に文脈上対応している。 (イ)は傍線部の前後のつながりから考えれば、解答が得られる。「あれ」は「命令形の放任用法」で、意味上は「譲歩」である。 (ウ)の「さらに～ず」(さらに～打消語)は、完全否定を表す基本重要構文である。また、「なつかし」も入試頻出語である。
	問 2	「あらねば」の「ば」に上接する「ね」は、打消の助動詞「ず」の已然形であるから、この「ば」は「仮定条件」ではなく、「確定条件」を表す。
	問 3	傍線部 A は、本文にある二つの問いのうちの一つ目である。この問いに対する答えは、その次の段落全体に述べられているので、そこで述べられていることと内容が合致する選択肢がどれかを吟味すればよい。
	問 4	傍線部Bに「情と欲とのわきまへ」とあるので、「情」と「欲」との相違がどのように論じられているのかに注意しながら、それが「恋」とどのような関係にあるのかを読み取る必要がある。傍線部Bを含む第 4 段落をしっかりと読むことが、正解を出すポイントとなる。ただし、同段落では「恋」という語は明示されず、「恋」を意味する語として「色」という語が用いられていることに留意しなければならない。
	問 5	センター試験では珍しい、傍線部を付さない設問である。こういう場合は、まずは設問文自体をしっかりと読むことが先決である。設問は、「情」と「欲」について、時代による変化および歌との関係の理解を併せて問うものである。「情」と「欲」が話題となっているのは、問 4 と同様であるが、「時代による変化」と「歌との関係」という設問の指示に忠実に従うことが重要である。それが述べられているのは第 5 段落であるが、「時代の変化」については本文の「上つ代」「後の世」という語に特に留意したい。
	問 6	問 5 と同様、傍線部を付さない設問なので、まずは設問の指示をしっかりと押さえることが大切である。設問は「歌」や「詩」が「物のあはれ」とどのように関わっているか、というものである。「詩」については、最終段落にしか述べられていないことと、「詩」は「人の国」のもので、「情」「物のあはれ」に関わる「歌」とは異なり、「きたなき欲をしもいみじきものにいひ合へる」ものとして捉えられていることを、しっかりと読み取りたい。なお、「物のあはれ」は本居宣長の思想を語る上で欠くことのできないキー・ワードである。

第4問	問1	<p>語句の意味を問う問題である。</p> <p>X・Yとも漢文の重要語句ではないので、文章中における意味内容を答えなくてはならない。Xの「議」は「外間議準」から世間の人々が寇準をどうしているのか、Xより後方から探す。Yの「沢」は「賢相…沢生民」から賢い宰相は人々をどうするのかを考える。ポイントとなる「外間」は注 6、「生民」は注 12 で説明されている語句であり、注まで丁寧に読むことが求められている。</p>
	問2	<p>部分解釈を問う設問である。一つの設問で、波線部 2 箇所の解釈が別々に問われたのは初めてである。また、例年の解釈問題と異なり、波線部 I・IIとも重要句形・語法が含まれておらず、文章の主旨を読解できるかが問われている。</p> <p>Iは「之」の指示内容が問われている。Iの直前「若キモ」の「モ」に注目して、波線部 Iは「愚駭」と逆接になっていることから選択肢を①・②・⑤に絞る。さらに、後方に述べられている嘉祐の発言内容から①が正答となる。</p> <p>IIは「知」の具体的内容が問われている。波線部 Iに含まれる「開封府」の内容(注 5 にあり)と、IIの後方の嘉祐との問答内容から考える。</p>
	問3	<p>書き下し文と解釈を別々に問う設問である。</p> <p>(i)の書き下し文は傍線部に含まれる句形・語法に注目する。比較形「不若」と再読文字「未」の読みと語順で②・④に絞る。さらに「為相」が傍線部Aの前文の「相タラン」と同じ意味であることに気付けば、④が正答とわかる。</p> <p>(ii)は(i)の書き下し文を訳出すればよい。</p>
	問4	<p>人物把握・内容理解力を問う設問であり、傍線部前後の内容に注目して考える。</p> <p>(i)の「言」「計」は、(ii)に「聴かれ」「従はれ」るものなので、「言＝発言・議論」「計＝はかりごと」と解釈することができる。傍線部直前の「故」から、前文の「自古、賢相…者、其君臣相得皆如魚之有之」と傍線部が因果関係になることがわかり、(i)は「賢相」となる。</p>
	問5	<p>理由説明を問う設問である。</p> <p>すべての選択肢が「○○は寇準に対して天下を太平にしてほしいと期待するだろうが、もし寇準が△△とすれば太平は実現されず、宰相の期待は失われてしまうから」となっているので、○、△△に該当する内容を傍線部前から探せばよい。</p> <p>傍線部Cの直前「文人負天下重望、相則中外以太平責任焉。文人之于明主、能若魚之有水乎」から、○○は「中外」、△△は「文人之于明主、能若魚之有水乎」に該当することがわかる。「若魚之有水」は注 13「如魚之有之」と同内容であり、問 4 との関連も考慮して正答を導くことができる。</p>
	問6	<p>傍線部説明を問う設問である。傍線部の具体的説明問題は、選択肢の内容がヒントになることがある。すべての選択肢が「王嘉祐は○○である。したがって△△という点では、父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない」となっているので、○○、△△に該当する内容を本文中から探せばよい。王嘉祐についての説明なので、嘉祐の発言内容から正答を導く。</p>